施工者に幸あれ 第68回

文化財の存続にかける

構造家・古川 洋

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■安芸構造計画事務所

千葉県の美浜駅を降りて少し歩くと，外国か，それとも劇画の世界に紛れ込んだかのような，パステルカラーのビルの続く街並みになった。そこに構造設計を営む古川洋さんの事務所がある。

会津山中の農家で育ち，法政大学の建築へ。新潟地震に遭遇した衝撃から建築構造の道を選んだと。「耐震に一番興味があったせいもあるが，阪神・淡路大震災以後は，文化財の建物に関しての耐震診断が主な仕事になっている」。重要文化財建築物の補強方法を選定するための模型が物語ります。

さらに，東日本大震災の話に及ぶのだが，その日は京都にいて運よく習志野にある自宅までたどり着いた。液状化で問題になった地域だから構造家としては危惧する状況である。けれど，周りは被災していたのに古川邸はほぼ無傷。隣地境界ブロック塀とコンクリートの間のわずかなクラックを行政から派遣された保険会社が見つけて保険金が出て驚いたとか。一応は被災者になった古川さんなのでした。この住宅の意匠設計者は，篠原聡子さん。日本女子大学の住居学科教授をしている建築家であり，建築家・隈研吾さんの夫人である。古川洋さんの人脈の広さを知りました。

■師は青木繁先生

法政大学青木繁先生のゼミを選んだのはなぜかと，覇志堂が質問。「川口衛先生の理論主体に比べ実験を中心とした研究に興味が湧いて…」。大構造家・坪井善勝系列なのだ。『JIAの建築家達』（建築家協会発信）に，古川洋さんが共鳴しそうな，一文を見つけた。「構造計画の本質は極めて男らしさに満ちあふれたものだが，空間をどのように創り上げるという段階で，女らしさの象徴ともいうべき鋭い感性と優しさに溢れた，愛する心とが極めて重要な意味を持つ」構造家・青木繁の思想に惹きつけられる。

吉田音楽記念館（設計／内井昭蔵）や長野県稲荷山養護学校の構造計画など古建築以外の建築でも力を発揮。沖縄コンベンションセンターの設計打合せでは，建築家・大谷幸夫先生が模型作成のために，常に粘土をこねている姿をみていた古川さんです。

■周りを大切に

稲山正弘東京大学大学院教授は，坂本功先生や田中文男棟梁との仕事の縁で，吉野ヶ里遺跡の復元に協力したことで，「木造を教えてくれた人です」とはご本人の謙遜かもしれないが，分野や年齢を問わずに関心のある世界，リスペクトする相手との交流を大事にする古川さんです。藤田香織東京大学大学院准教授に，「今携わっている重要文化財の解析についての考えを聞きたいと思っているところ」とか。古建築の修理技術と実践の第一人者として研究者の意見も尊重している。既存建築物の耐震化のより一層の促進が最終目的だ。

アフリカのウガンダへ木造建築の指導に行ったときの話も面白い。頼まれると嫌といえない性格なのでしょう。現地で徹夜してカスビ王墓茅葺屋根再建の提案をまとめるはめに。公的な仕事なのに報酬は渡航前の注射代にしかならず，その後は南スーダンの状況で，家族の反対もあり，再渡航はしなかったといいます。

■安芸とは

社名を見て広島に縁があるのかと思ってしまった。ところがネーミングにはユニークな経緯が。まず「あ」行にすると決めたそう。確かに名簿の順で先にくるから徳をする場面がなくはない。少し慎ましく次の文字は「か」行にした。安芸（あき）の響も好きだったしという。覇志堂も唸ったのでした。古川さんが丹精したペチュニアの花に見送られて，柔らかい気持ちで事務所を後にいたしました。